

サラリーマンのゆううつ

■PROFILE■

MASAYUKI TOYAMA 戸山 眞幸 [商社マン・1962年生まれ]

取扱高4位の大手商社に勤める彼はビックコミックスピリッツの「なぜか笑介」の主人公とスムーズにイメージがかぶる。油ぎることもない印象が彼のビジネスに大きな成果をあげているようだ。サッカーは抜群に上手。酒はあまり飲まぬようだが、ディスコティックはかなりお好きなようだ。

消費税までまき上げられるサラリーマン達が、日々走り回ることです会社だけがどんどん大きくなって、一人歩きを始めたような感じさえ受けます。

こういう総合商社のお偉いさんでも、毎週・週に数回一流コースへ出入りできる程の余裕はなかなかないものです。けれど実際は、いつものように姿を現すのです。彼らは、総合商社という大きな看板を前面に掲げ、接待費・交際費という伝家の宝刀を巧みに使い、一流コースで幅をきかしているのです。う。晴れわたった青い空、降りそそぐ太陽の下、緑に囲まれた大自然に包まれ、当日のスコアとプラスアルファを期待しつつ、プレーする大会社のキツネとタヌキのお偉いさん達はさぞ楽しく和気あいあいと、プレーするのでしよう。

昨年来、リクルートのかもめが乱れ飛び、政府高官、省庁への桁はずれの接待が話題になりましたが、桁のはずれ方が異常であったので、どこにでも転がっている話なのでしょう。

とにかく、今のゴルフ・ブームは少なからず好調な景気と、それにもなう企業間の接待、社交の場というのがベイスになっているようです。一流コースでプレーするにも財力がともなわず、かと言ってどこかのお偉いさんから声がかかるということがほとんど期待できない私達庶民にとって、やっぱりゴルフは深夜テレビを見て、そのイメージを忠実に打ちつばなし場で実行する。というのが正しいゴルフの楽しみ方なのかも知れません。ひょっとしたら、幅をきかしているOLさん達とプラス・アルファがあるかも知れないとひそかに期待しながら……。

笑ろてしまおうわ。—その2—
立ちあがれ。
私の前を通りすぎた爽やかな風。

■PROFILE■

PIRANHA・KANTON 広東ピラニア

[草むしり歴30年・1939年生まれ]

やっとのことで踏み切った愛車ドカティの数年間にも及ぶローンと、昔、バーのママに生ませたひとり娘が同時に手をはなれ、今では草むしりの仕事と街のチャチャいれを生きがいでしている。てんとう虫が友達、酒の場に限りずいかなるタイプののおっさんである。ただ、彼の左足にあるほくろはかわい。

近頃の私の笑いは乾いているのです。「はて? 乾いた笑いととは、どんなもんじゃ?」と怪訝そうに問うあなた、よくぞ聞いてくださった。私の笑いはそのほとんどが他人に向けてのもので、皆さんもご承知の様に、本人は全くの第三者的メガネで世の中を覗いているのであります。しかし最近では、年のせいか情け深くなりまして単なる嘲笑は出来なくなり、その人の身になって考える」と言った、子供の頃先生に教わった道徳的な考えのもとに控え目に控え目に、それでもやっぱり笑っているのではありません。

ある晴れた日、私は気分よくドカチ

やんを走らせておりました。すると前には年の頃は私と同じ、50代と見てとれる与太者らしきおっさんAがフラーリ、フラーリとカブを走らせておりました。前に走るおっさんAをうつつとしく思いつつ、前方の信号が黄色に変わるのを確認し、私は丁寧にギアをローに入れ、止まろうとしましたが、おっさんAはそのままフラーリフラーリ、ほうぶらの様にスピードを落とそうともしません。当然ブレーキをかけて止まっていなければならぬおっさんAの前にはこれまた小ぎたない軽トラが赤になった信号に率直に従い止まっておりました。「あぶない」と私は一瞬目を閉じてしまいました。しかしそんな私の心配など知ったこっちゃやねえとおっさんAのバイクは前のトラックに「ゴオオン」とにぶい音とともにぶつかり、止まりました。私は軽トラからこわい兄ちゃんでも出て来て、おっさんAに挑みかかりでもしたら大変だと思いましたが。しかし軽トラからは何の反応もありません。

やがて信号が青に変わり、軽トラはおっさんAのぶつかった傷跡も生々しく走り出しました。チラーリと軽トラの中を覗き見ると運転席にはこれまた私と同世代と見てとれる無気力そうなおっさんBが座っておりました。どちらのおっさんもこの出来事の当事者でありながら、お互いに気付かないフリをしているのであります。私は悲しくて笑ってしまいました。あまりにも無気力なおっさんA、B。面倒なのであるう。しかし私はとある国がその殻を破ろうとし、分裂し、内出血している現状をオーバーラップし、情けなくなっ

た。触らぬ神にたたりなし、沈黙は何も生み出さないのである。その殻を破ろうとしなければ、何も生まれません。立ち上がれ、おっさんA! おっさんB!

少し感傷的になって走る私の前を、まだおっさんAはフラーリフラーリ走り続けていた。するとその時、横からいきなり白いマークII(大きな矢沢永吉ステッカーを黒いウインドーに貼り付けていた)が飛び出して来た。「あぶない、おっさんA! そいつらは若くて意気がいい。さっきの様にはいかないぞ」私はまたもや一瞬目を閉じてしまいました。おっさんAはさっきまでのおっさんと同じおっさんとは思えない素早い身のこなしで、熟練を積んだと見えるテクニクで車体を傾けたのである。両車とも無キズであった。マークIIの中では「ヒュー」というヤンキーさながらの感嘆の声が上がっていた。おっさんAのテクニクを讃えるヤンキーを尻目に、目を丸くしている私の前を、おっさんAはびゅんと加速し、風の様に去っていった。いいぞ、おっさんA。狡くてすばしっこくて素敵だ。ガンバレ。私はこのおっさんAのお陰でその日一日、さわやかだったのである。

クラブ FAME COLUMN 1989.

FROM KYOTO JAPAN

HAPPY HAZARD REMARKS

FROM KYOTO JAPAN

キモチにカタチを与えてあげよう

募集中 コピーライター
デザイナー

OFFICE EYE
京都市東山区五条大橋東入東橋詰町13
銭平ビル3F
Phone : 075-531-1372